

2022年度第2回日本学連臨時幹事会議事録

【日程】 2022年7月25日(月) 20:00 ~ 0:00

【場所】 Zoomにてオンライン開催

【議事録作成者】 鈴木璃土(筑波大学,責任者)、鎌倉京平(筑波大学)

【目次】

1.2022ICMの枠配分について	3
-------------------------	---

2022年度第2回日本学連臨時幹事会議事録

出席者(敬称略)

氏名	役職	学校名
谷野 文史	理事	筑波大学卒
浴本 悠貴	幹事長	神戸大学
坂巻 朱里	副幹事長	十文字学園女子大学
荒木 孝大	事務局員	広島大学
鈴木 璃土	広報部長	筑波大学
鎌倉 京平	広報部員	筑波大学
宮川 葵衣	普及部員	名古屋大学
鷺津 加子	渉外部長	東北大学
衣笠 匠斗	会計監査	東京大学
安田 壱耀	北東学連幹事長	福島大学
柴崎 愛有	北信越学連幹事長	新潟大学
市川 竣介	関東学連幹事長	筑波大学
島田 智也	東海学連幹事長	名古屋大学
松崎 莉子	中九四学連幹事長	広島大学

また、参考人として以下の方が参加した。

氏名	所属	目的
藤澤 廉	2021年度北東学連幹事長	意見書について説明のため

(注)議論の本筋と関係のない会話は適宜削除している。

1.2022ICMの枠配分について

浴本：今日の流れを説明する。まずは前回の議論について振り返り、その後各地区学連からどのような意見があったかを聞き、日学枠の是非について議論する。

今日の幹事会のゴールとしては、日学枠を用いるか用いないかの議決を取るところまで行きたいと考えている。できれば、枠配分にどの成績を用いるかまで決められればと思う。

今回参考人として東北大の藤澤さんに来ていただいた。

流れについて質問はあるか。

浴本：無いようなので前回の議論を振り返る。

東北大からICM2021の結果をそのままICM2022に用いることに対して意見書

→案としては、

- ①従来通り規約を適用（全学連が2021ICMの結果を用いる）
- ②北東学連以外2021ICMの結果を用いる
- ③全部の学連で2021ICMの結果を用いない
- ④永山案（北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連は別のインカレの結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする）
- ⑤その他

の5つに分けられる。

各案のメリット・デメリットについて議論。

→日学枠を設けるか否かで②③と④に分けることができるため、ひとまず日学枠を設ける是非という論点に着目する。

→各地区で納得感をもってもらうため、各地区に下ろして日学枠の是非についての意見を募集する。

各地区の日学枠の是非についての意見は以下の通り。

北東：日学枠賛成

関東：日学枠反対（ただし、僅差）

北信越：どちらでもよい

東海：日学枠反対（デメリットに比べてメリットが小さい）

関西：日学枠賛成

中九四：日学枠賛成。ただし、北東学連のみが救済を求める場合は日学枠を設けず、北東学連のみ救済でもよいのではないかという意見もあり。

（まとめ）賛成3反対2賛否なし1

論点は以下になると考えている。

・日学枠の是非を決める際に地区学連の単純な数で決めるかor関東学連の結果に着目するか※日学枠の適用が示された理由として、北東のみ救済するのは不適當であると、多くの欠員が出た関東から反対意見が出る可能性がある、というものがある

では、各地区学連からどのような意見がでたか、ここで話して頂きたい。

安田：北東学連では最初票が割れていたが賛成となった。

極端な意見はなかったという印象。

賛成意見としては、日学枠を使うことで昨年度ICMの結果を用いることができるという意見があった。

反対意見としては、北東のみ救済する点と、日学枠を設けることで2つ救済措置を生むことに成るのではないかという意見があった。

北東全体としては以上である。

市川：まずおおまかな意見について、こちらは反対となりました。

ただし、賛成7反対9棄権1と比較的僅差の反対となっており、賛成の考えの加盟校も少なくありません。

具体的な意見についてはこのような意見が出ました。

○賛成

・平等になる分には良い。

・日学枠を採用したときの具体案として、日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を使う案を提示する。日学枠を使うことで北東学連への「著しい」不平等

を緩和した上で、全学連がICM2021を使う。北東のみ過去大会の結果を使う必要はない。

○反対

・今回の地区学連の救済という目的を考えると、ごく僅かなトップ層を救済するための日学枠は根本的解決策にならないのではないかと

・日学枠を使うとしても、各学連が納得するかつ具体的な解決策を提示してほしい

・日学枠を採用しない際の実案として、案①北東学連が過去大会を使う場合は日学枠は必要ない、案②ICL2022の結果を使えばコロナの影響なく平等である

○意見(賛否なし)

・そもそも救済する必要があるのか

・どんな案を選ぶにしても、前年度実績枠は去年度の結果を堅持して欲しい

浴本：北東学連が過去大会を使う場合日学枠は必要ないという意見は、関東の救済は無くても問題ないということか。

市川：おそらく北東を救済した上で日学枠によって更に北東が有利になることは防ぎたいということと思う。

柴崎：どちらでもよいとは書いてあるが、特に反対意見が出なかったためである。北信越には影響がないという意見があった。

島田：東海としては賛成1反対5で、全体としては反対が多かった。ただ、強い意見があったというよりは、必要ではないのではないかという程度のものだった。東海はコロナでの欠場がなく、日学枠で救済される選手は少ない枠でも十分通過するため救済にならないのではないかという意見が多かった。

それに対して、特別な規則を適用することは悪用されるリスクや人的コストがかかるという懸念点がある。

東海としては、日学枠については反対が多かったが、北東学連の救済については反対がなかった。

浴本：日学枠についてはメリットよりデメリットのほうが多いため反対、という認識で大丈夫か。

島田：その通りである。

松崎：学連全体では日学枠を設けることに賛成だが、多くを占めたのは、意見がある人に合わせたいというものであった。

中九四全体では意見がなくどちらでもよいというものが多い。

賛成している人の中で、北東学連のみに救済措置を行うのであれば日学枠は必要ないのではないかという意見が4人、そういった条件なしで日学枠を置いて問題ないという意見が5人であった。日学枠への反対意見はなかった。

- ・最終的に本件の決定権はどこにあるか、どこに落とそうとしているか
- ・各学連に通知の際に、なぜ救済なしがなかったか
- ・日学枠の定義および運用フローは定まっているか

谷野：最終的に本件の決定権はどこにあるか、どこに議論を落とそうとしているか確認したい。

浴本：技術委員会の谷川さんと話した際に、日本学連として決定したことならば従うとのことであった。

きちんと議論した上であれば問題ないとのことであった。

谷野：決定権については技術委員会と話をし、総会で決めることが決まっているのであれば問題ないと思う。どこに落とそうとしているかというのは、決定フローの話だったので、先程の解答で問題ないです。

浴本：総会にも流して各地区の承認は得るつもりである。

浴本：前回の幹事会でも救済しないことも選択肢に含めて地区学連へ意見を募集するべきという意見はあったが、各地区では自分の学連の恣意的な意見が入ってしまうことを懸念した。

日本学連でならフラットな議論ができると考えた。

日学枠の定義については、使うとなった際は詰める必要があるが、基本的には2020年度に利用した形を基本とする予定です。

運用フローもそれに合わせる形になると考えている。

谷野：今回の意見聴取というのは、なにかを決定するというよりかは、まず意見を聞きたいということか。

浴本：あくまで参考にするという形。

谷野：そんなに関わっている訳では無いが、学生から話を聞いていると、この意見聴取＝議決というような伝わり方をしているように感じたのでお聞きした。

もし総会をやるのであれば、恣意的な意見が入ってしまうという考えもあるが、救済前提で話を進めるのは幹事会の動き方として強引すぎるのではないかと考える。

これだと救済なしという学生の要望が通らなくなってしまう。もちろん幹事として判断したというはあるが、一般の学生の意見も取り入れるべきであると思う。

日学枠の運用フローについて聞いたのは、総会での議決の際先に明示すべきと考えたため。

浴本：救済ありきで進めるのが強引ではあるということは感じているが、総会だと一校一票であるため、北東以外にとっては救済する必要がないため、救済しないという意見に落ち着いてしまうのではないか。

当初は救済しないことも含めて議論をしており、その結果として救済をする方針としたので、それを総会で説明すれば強引という意見は出ないのではないかと思っている。

谷野：学生から話を聞いている限り、救済ありきで進めるのは適切でないように感じる。

技術委員会という第三者機関に決定を委ねるという案もあるのではないか。学生はどうしても当事者であるため、決定するのが難しい。

総会で、幹事会からの案に追加して、技術委員会に任せるという案を置くのもありなのではないか。

浴本：各地区で救済ありきで聞いてもらったが、そもそも救済しなくていいのではないかという意見がどれほど出たか確認したい。

市川：関東では1校から出ていた。具体的な大学名は明示しないが、多くの加盟校に利害が発生する事項に対して幹事会のみで決定するのは良くないのではないかという意見があった。

浴本：他の学連では無かったか。

浴本：無いようなので一旦整理する。

浴本：日学枠について議決を取る予定であったが、先程の谷野さんの意見を踏まえると、技術委員会に委ねるという意見を加えても良いかもしれない。

谷野さんへ質問だが、総会で議決を取る上でそれぞれの案と別に、技術委員会に任せる案を置き、最も多かった案で行くということを想定しているか。

谷野：それは良いのではないかと考えている。

浴本：今日のゴールとしては日学枠の是非を決定するのではなく、総会でどの案を挙げるかを考えるのが良いのではないかと考える。

谷野さんに質問であるが、救済しないという意見が挙げられた場合、それは仕方ないという認識であるか

谷野：救済なしというよりは、技術委員会さんに最終的な結論を出してもらう形にすることで、全加盟校の納得を得るということ。

救済なしというのは恣意的である。この議論は誰かが得をして誰かが損をする。ルールとしてずっと存在しているものを変えるのは良くないので、第三者機関に任せる形が良いのではないかとということである。

浴本：技術委員会さんに委ねた場合、そこからの運用フローはどのようになるのか。

谷野：技術委員会さんに、議事録をしっかりと作って学生に説明できる形で決定してほしいとお願いすることになるのではないかと。

浴本：技術委員会の決定に対して意見を言うことは可能か。

谷野：委任した以上そこに対して意見をいうのは違うのではないかと。

市川：整理させていただきたい。

今問題になっているのはそもそも救済するのかということ。

今日の道筋として、総会でどのような案を挙げるのかということを決定するということか。

浴本：そもそも救済するのかどうかは総会が決めると考えている。

総会でどの案を挙げるかを決定するのが現段階でのゴールであると考えている。

市川：総会の議題に上げる案として今出ているのは、そもそも救済するのかという案、技術委員会に決定を委ねる案、救済する上で日学枠を使用する案、救済する上で日学枠を使用しない案、また後者2つは過去のどの成績を使用するかという内容もある。

という大まかに4つの案があるという認識で間違いないか。

であれば、一つ一つについて具体的に検討していく形になるのではないか。

浴本：その認識で問題ない。

一つ思ったのは、意見を上げる上でそもそもそれまでの意見としては各地区学連の恣意的な判断が入ってしまうから、幹事会内で決定して、それを承認するという形で良いと考えていたが、幹事会内のみで決定するというプロセスに問題があると考えた。

各地区のメンバーが参加している日本学連がよりフラットな立場で判断できると思われ、そのような日本学連の意見に賛成する学校も一定数存在すると思われるので、100%並列で案を出すよりかは、幹事会として推す案を伝えるのが良いのではないかと考えている。

市川：日学としてはこの案を推すというような形か。

浴本：その通りで、一つの案を承認するか否かではなく、それぞれの案を出した上で、幹事会の議論ではこの案が適切と考えた、という旨を伝える形。

地区学連もあるが、日本学連としても意見を挙げるべきであると考えた。

総会で挙げる案としては、

- ①従来通り規約を適用（全学連が2021ICMの結果を用いる）
- ②北東学連以外2021ICMの結果を用いる
- ③全部の学連で2021ICMの結果を用いない
- ④永山案（北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連は別のインカレの結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする）
- ⑤その他
- ⑥技術委員会に委ねる

以上が挙げられる。

具体的にどの大会を用いるかは、幹事会内である程度決めて、具体的にどの大会を用いるかイメージできるようにして議案として出したいと考えた。

鎌倉：日学枠を採用しつつ、ICM2021の枠を採用するという関東学連加盟校の案はその他の中に入っているという認識で大丈夫か。(以下関東学連の意見から引用)

「日学枠を採用したときの具体案として、日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を使う案を提示する。日学枠を使うことで北東学連への「著しい」不平等を緩和した上で、全学連がICM2021を使う。北東のみ過去大会の結果を使う必要はない」

浴本：その他の意見のところでも自分のところにも意見があったので共有する。

北東学連の減少分の5枠は補填するが、追加分の選手に来年度の枠を取る権利はないという案。

メリットとしては他学連からの反発が減るのではないかという点と、2022ICMで5名が枠を取れば合計10枠になるため、北東学連からも反発は出ないのではないかという点。

市川：いま浴本さんが出した意見はどの学連から出てきたものか。

浴本：東海学連の学生からの意見である。

柴崎：すべて目を通せなかったが、枠を取れる5人は上位5名ではなく選手を指定するものか。

浴本：そういった意見であった。

松崎：総会では話し合うのではなく、投票で決めることになるか。

浴本：意見が出た場合はそこで話し合う可能性はある。

松崎：投票でないと収束しないと考える。幹事会としてはこの案であると示すのがいいと考える。

浴本：地区学連の意見を聞いた上で、日本学連幹事会としてはこの案を推しますという形にはしたいと考えている。

規約上総会が最高決定機関であるので、幹事会としては救済する方向で行きたいと考えているが、総会によって救済しない方針になった場合はそれで行く形になる。

議論での決着はつきづらいと思われ、投票で決めることになるかと考える。

松崎：救済するかどうかも総会で決めるのか。

浴本：幹事会のみで決定するのは強引という意見が地区学連で上がったので、幹事会の決定のみでは進められないと考える。

松崎：技術委員会に委ねるという案はなくなったのか。

浴本：そういうわけでは無い。技術委員会に任せるという案も並立して総会に挙げる。

鎌倉：日学幹事会の議決というのは誰に対して効力を持っているのか。あくまで幹事会内での意見をまとめるためだけのものか。

浴本：総会で反対がなければ幹事会の議決がそのまま日学の決定になるが、今回は反対意見もあるため、幹事会案の承認をしてもらおうというよりは総会で決定することになるので、言う通り幹事会内の意見をまとめたただけであり、特に効力は存在しないだろう。

浴本：意見がなければ総会で出す案をまとめて行きたい。

- ①従来通り規約を適用（全学連が2021ICMの結果を用いる）
- ②北東学連以外2021ICMの結果を用いる
- ③全部の学連で2021ICMの結果を用いない
- ④永山案（北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連は別のインカレの結果を用いる＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする）
- ⑤日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を用いる（その他1）
- ⑥北東学連の減少分の5枠は補填するが、追加分の選手に来年度の枠を取る権利を与えない（その他2）
- ⑦技術委員会に委ねる

②～④について、どの大会を用いるかということ具体的にしないと投票しにくいと思うので、具体的に考える。

②～④について、北東学連が2018ICM、2021ICL、2022ICLのどれを用いるか。

この状態だと全13案になってしまい、投票がばらけすぎてしまう。そのため、幹事会でどの大会を用いるかを定めた上で、上記7案で提出する形にしたい。

松崎：中九四だけかもしれないが、意見が多い学連に合わせるという案もあるかもしれないため、そのような選択肢も用意してほしい。

浴本：第1～3希望まで挙げるという案も考えたがどうか。

松崎：その案だと多数決をとる上でややこしくなるのでは無いか。

市川：1～3希望まで聞くのはややこしくなると思う。決選投票の形を取るのでは無いか。

中九四学連の意見が多い学連に合わせるという案は、棄権にすれば良いのでは無いか。僅差だと運用が難しいように感じる。

浴本：上記7案で、①⑤⑥⑦に関しては具体的になっているので問題なく、②～④でどの大会を用いるかを絞りたい。①～⑦で、幹事会としてどの意見を推すかまで決めたい。

②～④で、案によってどの大会を使うか変えるのが望ましいと考える方はいるか。

いないようであれば、どの案でも1つの大会成績を用いるのでいいのではないかと思っている。

各大会のメリットとデメリットをまとめる。

2018ICM

メリット：コロナによる不出場校がない最後のICMであること。

デメリット：古すぎる。適切な競技力が反映できない。

2021ICL

メリット：直近で最も多くの大学が参加できた大会。

2021ICMと同じ世代での結果を枠配分に用いることができる。

少なくとも選手権クラスでは全大学が出場できている。

デメリット：ミドルの枠配分をロングで決めるのは問題ないかという点

2022ICL

メリット：最も直近でフォレストの競技力を計ることができる

コロナによる不平等もない可能性がある

後出しの議論ではなく、まだ結果が確定していない状態で決定できる。

(補足：コロナによって参加校数が減った場合、どれくらいの人が参加出来たら枠配分に使用するかを決めておく必要がある。また使用できない場合の大会も決める必要がある。)

デメリット：ミドルの枠配分をロングで決めるのは問題ないかという点

出席者全員から意見をとる。

2018ICM：0

2021ICL：4

2022ICL：11

棄権：2

柴崎：2021ICLの理由として、昨今またコロナが広がっている状態なので、2022ICLも2021ICMと同じ状況になってしまう可能性があり、少しリスクがあると考え
る。

また、例年だと枠を決めるのは昨年の成績なので、競技力が昨年とは大きく異なる可能性がある。

浴本：2022ICLとした理由としては、コロナが広がっているものの、どれくらいの参加者が参加できたかの基準を定め、万が一コロナが起きた場合も予備案があるためそこは問題ないを考える。また、現在確定した結果を用いる後出しの議論ではなく未来の結果を用いるほうがクリーンであるを考える。

また、枠を決めるのは昨年の成績ということだが、これは年1回大会が行われているためであり、あくまで目的は直近の競技力を用いることと思う。そのため、2022ICLを用いるべきであるを考える。

先に述べた基準によって2022ICLの結果を用いることができなかったときは2021ICLを使う方針で問題ないと考えているが、意見はあるか。

柴崎：全学連ICM2021の結果を用いないという場合にはICL2022を用いていいと思うが、ICM2021を使う場合は、世代を合わせるべきだと考えた。

浴本：世代を合わせるという観点は自分はなかった。その観点も踏まえると②～④どれでもICL2021を用いるか、②～④どれでもICL2022を用いるか、全学連で使用する記録の世代を統一するという意見の3つになると思う。

ICL2021：0

ICL2022：8

世代統一：5

②～④どれでもICL2022を用いる方針で決定する。

特段幹事の中で賛成が無ければ、投票がばらけすぎるのを防ぐため、⑥案は総会には出さない方針で行きたい。

賛成がないため⑥案は除外する。

- ①従来通り規約を適用（全学連が2021ICMの結果を用いる）
- ②北東学連以外2021ICMの結果を用い、北東学連はICL2022の結果を用いる
- ③北東学連以外2021ICMの結果を用いる＋北東学連はICL2022の結果を用いる
＋日学枠で全部の学連が公平になるようにする
- ④全部の学連で2021ICMの結果を用いず、ICL2022の結果を用いる
- ⑤日学枠を採用しつつ全学連ICM2021の結果を用いる（その他1）
- ⑥技術委員会に委ねる

ICL2022を使用する基準については次回幹事会で決定する。

基準を決めた上で総会に提出する。

市川：流れとしては賛成。ただ日学枠の定義について認識を共有しておきたい。

浴本：幹事会参加者の意見としてまとめる。

前回幹事会内での反応をみた感じでは、①に賛成の方はいなかったなので、①以外で意見を募集する。

②：8

③：1

④：3

⑤：0

⑥：0

浴本：東北大や一部の大学はICM2021に参加出来なかったが、ほとんどの大学は参加することができたため、その結果を用いるべきと考えた。また、日学枠は人的コストやトップ選手しか救済されないため救済措置として不適であると考えた。

安田：③の理由としては、②同様ICM2021の記録を使うことが適切であることと、日学枠を用いることで救済も行えると考えていたが、②、⑤といったICM2021の記録を用いる案であればいいと考える。

市川：④の理由としては、特定の学連が別の大会の結果を用いるということが起こらず公平であり、2022ICLであれば直近の競技力を計ることができるため適していると考えた。

坂巻：④の理由としては、後出しにならないことが理由である。また個人実績枠についての議論もやりやすい用を感じる。

この先のコロナの状況が読めないことと、ICM2021に出場できた大学の前年度実績枠が実質なくなってしまうことがデメリットである。

浴本：個人実績枠についても議論する必要がある。

次回以降に議論する。

幹事会参加者の意見をまとめる。

②：9

③：0

④：3

⑤：0

⑥：0

浴本：②北東学連以外2021ICMの結果を用い、北東学連はICL2022の結果を用いる案を幹事会として総会に推薦する。

ICL2022の結果をICM2022に用いるための一定の基準と、ICL2022の結果をICL2023に用いる基準は同じものがないと考えているが、どうか。

反対意見がないためその方針を進める。

個人実績枠については次回議論する。

以上